

もうけるための 肉豚肥育経営のあい方

県普及教育課専攻 多田昌男

1月以降急落した肉豚価格は、5月の平均岡山相場276円をソコ値に、6月の7月とやや上向き、7月平均相場は300円程度に回復した。平年であれば夏から冬にかけては豚肉の需要に伴い上昇の傾向をたどるのが普通であるが、今年春の子豚生産頭数は予想以上に多く、昨年2月の最低相場時期と同数程度といわれている。

そうすると、これらの子豚が肉豚として市場に出廻る時期は、このあきであるから余り期待が持てないことになる。うまくいっても300円から20~30円程度の範囲を上下することになる。このような状況であるから昨年下半年のような「夢よもう一度」はとても望めない。

これからの肉豚肥育は市況をみはからって行うことは勿論であるが、少々価格が上下しようが、びくともしない経営でなければならない。価格が安くなったから止め、高くなると始めるとというのが従来の豚飼いである。これでは何のために豚を飼っているのか分からない。無計画な豚飼いは、むしろやらない方がよい。

(第2表) 1戸当り粗収入目標

区 分	繁 殖 肥 育 経 営					肥 育 経 営				
	生産量	単 価	金 額	所得率	所 得	生産量	単 価	金 額	所得率	所 得
肉 豚	頭	円	円	%	円	頭	円	円	%	円
	95	16,000	1,520,000	37.5	570,000	180	16,000	2,880,000	20	576,000
肉 豚	1	20,000	20,000	50.0	10,000					
	計		1,540,000		580,000			2,880,000		576,000
算 出 基 礎	肉 豚	肥 育 期 間 体 重 20~90kg 山 河 時 体 重 90kg 枝 肉 量 90kg(体 重)×0.7(枝 肉 歩 留)=63kg≒60kg 枝 肉 1kg 価 格 280円 1 頭 当 り 価 格 60kg×280円=16,800円-800円(出 荷 等 経 費)=16,000円								
	肉 豚	枝 肉 量 150kg(生 体 重)×0.7(枝 肉 歩 留)=105kg≒100kg 1 頭 当 り 価 格 100kg(枝 肉 量)×200円(枝 肉 1kg 価 格)=20,000円								

一、所得からみた経営規模

豚を飼育する場合、どのくらいの規模がその農家に対して適性であるかは、なかなかむづかしい問題である。その農家の経営規模、資本、家族労働力、周囲の環境等の諸条件に合った頭数を決定すべきである。

最近自立経営農家の育成が強くなり、中途半端な農家は兼業的な主食確保農家に過ぎなくなったが、岡山県では自立経営農家としては、年間所得759,000円以上でなければならない。専業養豚を経営する場合は、総所得の75%、570,000円程度を豚であげなければならない。

所得から逆算すると繁殖肥育併用でいくとすれば、繁殖豚を6頭飼育しなければならない。そして生産子豚の殆どを肥育出荷すれば安定型の養豚経営といえよう。しかし繁殖技術がともなわなかったり、都市周辺で残飯利用をする場合はむしろ肥育専門で経営した方が有利である。

例えば発育の早いランドレース繁殖豚を6頭飼育するとすれば、第1表のように1回10頭は分娩することになり、年間2回分娩すれば母豚6頭で120頭、育成率80%で96頭を離乳させることができる。このうち雌1頭は更新用として育成すれば、年間95頭を肥育することができる。

肥育専門でいくとすれば常時豚肉60頭、年3回転で180頭肥育しなければならない。以上の経営から

(第1表) ランドレース分娩頭数と育成率

産次	分 娩 頭 数			死産率	離 乳 頭 数			育 成 率
	♂	♀	計		♂	♀	計	
初産	6.2	4.3	10.5	10.3%	4.4	3.6	8.0	86.1%
2産	5.3	5.2	10.5	10.4	4.2	4.0	8.2	87.9
3産	5.2	6.0	11.2	9.9	3.6	5.1	8.7	88.8
4産	5.4	5.3	10.7	8.8	4.0	4.1	8.1	89.0
5産	6.5	7.5	14.0	0	5.0	7.0	12.0	88.9
平均	5.6	5.2	10.8	9.5	4.2	4.2	8.4	87.8

(注) 母豚36腹(37~38年度酪試調査)の平均値を示す。育成率は分娩頭数926頭から死産89頭および淘汰28頭を差引いた哺乳開始頭数819頭に対する離乳頭数719頭の割合を示す。

岡山畜産便り 1964.09

あがる1戸当り粗収入目標は第2表のとおりであるが繁殖肥育経営では肉豚1頭当り所得6,000円、肥育のみでは1頭当り所得3,200円となる。肥育素子豚の自家生産により、他地区からの伝染病の侵入防止と肥育期間の短縮ができ養豚経営は安定性を増すことになるから、技術と施設が伴えば繁殖肥育経営で進むべきである。しかし技術がともなわない場合は、肥育経営のみにとどめ、技術習得後経営拡大を図るべきである。

二、施設と機械器具

1、豚舎

豚舎にかかる費用はできるだけ安くして、固定費の占める割合を少なくする。しかし余り経費をかけなかったため耐用年数が短く、かえって年間の償却費が高つくから、ある程度の施設はしなければならない。木造トタン葺が最も安くつくが、坪当り5,000円から最高15,000円くらいの経費が普通である。それ以上の施設経費をかけると固定費が大きくなり経営は不安定となる。

豚舎の理想的なものは、木造セメント瓦葺、または軽量鉄骨スレート葺であるが、経営内容に適合したものを選ぶべきである。都市周辺から離れ、しかも平坦な土地でゆとりがあれば2坪程度の簡単なコロニー豚舎を作り、この周囲を電牧でかこって乾乳母豚群飼育、あるいは肉豚を肥育することができ、管理が省力化され、糞尿処理の心配がなくなる。

豚舎は通路に面して飼槽を作り、後部に便所を設けたデンマーク式が豚房掃除に最も省力的であるが、1頭当り所要面積は繁殖豚舎3～4坪、肉豚舎0.4坪、コロニー豚舎0.2坪程度がよい。1房の大きさは繁殖豚舎、肉豚舎とも3～4坪、コロニー豚舎2～4坪がよい。そうすると自立経営にふさわしい収入をあげるため、繁殖肥育経営では繁殖豚舎1棟18～24坪、肉豚舎1棟18～20坪、コロニー豚舎1棟4坪程度が必要となる。肥育経営では肉豚舎1棟18～20坪、コロ

ニー豚舎1棟4坪程度が必要となり、尿溜りは、それぞれ4～5立方米程度必要である。このほか堆肥舎2～4坪が必要であるが、暖かい時期は敷糞を使用しない場合が多いから、糞は早めに畑に施肥した方が取扱いが容易である。

2、運動場

運動場は繁殖豚1頭当り6～10坪がよいが、群飼いの場合はややせまくてもよい。コロニー豚舎の場合、肉豚は運動場があまり広すぎると肥育効果が落ちる結果になるから1頭当り0.5坪程度にとどめる。

3、サイロ

サイロは自給飼料の生産ができなければ考える必要はないが、繁殖肥育経営の場合は第3表程度の飼料が必要であるから、できれば作りたいものである。年間必要青刈飼料量と濃厚飼料必要量の10%程度をイモ類で自給するとすれば、その総量を26,000kgの40%、10,400kg程度のサイレージを作らねばならない。そうすると直径5尺、高さ11～12尺程度のサイロが3基必要である。

26,000kgの飼料を生産するには、牧草地12aでラジノクローバー8,400kg(反当7t)、イモ40aで9,600kg(反当2.4t)、イモヅル8,000kg(反当2t)の作付が前提条件となるから、これだけの耕地と労働力がなければ期待がもてない。

4、器具

養豚経営において最低必要な機械器具は、電牧器、噴霧機、台秤、一輪車、リヤカー、押切程度で、自給飼料生産用としてはイモヌカ飼料機等がある。尿ポンプのほか日常管理機材があればよく、乳牛ほど経費を必要としない。このほか自動給餌器があるが、

(第3表) 飼料所要量

(繁殖肥育経営：年間)

区分	頭数	青刈飼料			濃厚飼料			
		1日当り	期間	数量	1日当り	期間	1頭当り量	総量
繁殖豚	6頭	2Kg	365日	4,380Kg	増飼 3Kg	365日	1,395Kg	8,370Kg
肉豚	95	0.7	180	11,970	2.5	120	245	23,275
計				16,350				31,645
説明	濃厚飼料の10%自給イモ類換算 $31,645\text{Kg} \times 0.1 \times 3(\text{イモ換算}) = 9,493.5 \div 9,500\text{Kg}$ サイロ詰込量 青刈16,500Kg + イモ類9,500Kg = 26,000Kg $\times 0.4(\text{サイロ詰込割合}) = 10,400\text{Kg}$ 肉豚濃厚飼料1頭当り $70\text{Kg}(\text{増体量}) \times 3.5(\text{飼料要求率}) = 245\text{Kg}$							

岡山畜産便り 1964.09

自動給餌は飼料要求率が多少大きくなるから協業経営における省力管理以外は行わないほうがよいと考える。

三、肥育豚は協同化しやすい

肥育経営において個人経営と協業経営とどちらが有利であるか。生産費から比較すると第4表のように協業が優れていることが解る。肥育は管理が単純であるため協業により省力管理ができるが、繁殖は技術的に熟練する必要がある。このため繁殖肥育併用の協業を行う場合は、繁殖部門を個人経営とし、離乳子豚の取引以降を協業経営にする方が個人差が少なくてよい。つまり肥育豚1頭当りの生産費は協業経営が有利であり、年間1頭当り所要労働時間も少なくてすむ。勿論多頭化により省力管理できるところが大きい。

(第4表) 肥育豚1頭当り生産費

区 分	個人経営 6戸平均	協業経営 4組合平均
年間出荷頭数	25頭	152頭
肥育期間	138日	136日
肥育期間の体重	13.5~77Kg	13.1~77.2Kg
飼育労働費	1,103円	988円
購入飼料費	10,120	7,658
自給飼料費	848	861
もと豚費	3,647	3,345
その他費用	605	389
計	16,323	13,241
副産物収入	324	362
第1次生産費	15,999	12,879
地代	30	23
資本利子	503	358
第2次生産費	16,532	13,260
販売価格	14,076	13,390
1頭年間所要労働時間	13.75時間	12.5時間

(注) 西山太平氏 39年栃木県調査成績による。

(第5表) 肉豚の限界飼料費

		円	円	円	円	円
		260	280	300	320	340
枝肉1kg単価		260	280	300	320	340
販売価格		14,144	15,232	16,320	17,408	18,496
子豚価格		3,495	3,765	4,040	4,315	4,545
差引		10,649	11,467	12,280	13,093	13,951
共通費		3,712	3,712	3,712	3,712	3,712
限界飼料費		6,937	7,755	8,568	9,381	10,239
増体1kg当り飼料費		99.1	110.8	122.4	134.0	146.3
飼料単価		飼料要求率				
一	22円	4.5	5.0	5.6	6.1	6.7
	24	4.1	4.6	5.1	5.6	6.1
Kg	26	3.8	4.3	4.7	5.2	5.6
	28	3.5	4.0	4.4	4.8	5.2
当	30	3.3	3.7	4.1	4.5	4.9
	32	3.1	3.5	3.8	4.2	4.6
り	34	2.9	3.3	3.6	3.9	4.3
	36	2.8	3.1	3.4	3.7	4.1
	38	2.6	2.9	3.2	3.5	3.9

(注) 中央畜産会昭和37~38年関東地方調査による。と殺手数料はゴミ皮と相殺。

最近のように輸入飼料費が1kg 34円から36円に値上りすると、肥育効率のよい素豚を選ぶことは勿論であるが、短期肥育により資本の回転を図り飼料要求率を小さくするよう研究する。又、できれば多少でも自給飼料を生産することも必要である。

では豚枝肉1kg当り価格がどのくらいの場合、飼料単価及び飼料要求率はどのくらいがよいかを示せば第5表のとおりである。例えば枝肉1kgが300円の場合、飼料1kg 34円とすれば飼料要求率は3.6、つまり体重1kg増体に3.6kgの濃厚飼料がいることになる。

適正な肥育効果をあげるためには、群飼育としては1豚当り同腹のもの8~12頭を限度とし、生年月日の差のある子豚を数群飼い、大きくなったものから出荷する方法はよくない。それはシタ子になった豚の飼料効率が悪く、出荷時の90kgになるまでに大変無駄な飼料を労費するため1群の飼料要求率が悪くなるためである。

高価の時期は高い飼料でどんなに飼育してもけっこう採算がとれるが、今年のように安値の年は特に飼料要求率を有利にし、生産費の殆どを占める飼料費をできるだけ安くするよう工夫し、安定した肉豚肥育を進めたいものである。

フトラックスの肉豚肥育効果 (畜産の研究 39. 4)

肉豚肥育の採算を良くするため、種種の肥育剤が市販されていますが、いずれも一長一短で完全なものはないようです。ここに去勢牛用フトラックスを去勢豚に用いて肥育意した結果、良好な成績をおさめた報告があります。

フトラックスペレットを去勢豚の耳根外側皮下に2個埋没していますが、肉質及び歩留りは向上、体形は尺幅が増大して雌型に近くなって、1日当りの増体量は5%、増肉量は6%も増加しており、副作用はなんら出ておりません。学者の計算によると、これは5.7%経済価値が向上したことになり今かりに、肉豚1頭が25,000とすると、その手取額は1,425増しとなり、薬剤費手数料250円を差引いても1,000円以上も儲けが増えることとなります。

性ホルモン剤を用いて肥育する場合豚では牛、家禽ほど効果は著明ではありませんが、去勢豚に用いる場合には相当に経営上有利な効果をもたらすと思われます。

豚の皮膚病をなおす

豚の皮ふ病にはしっしん、かいせんのうちうほう性皮膚炎の3つがある。皮ふ病にかかると肥育もおもうようにすまなくなる。

しっしんはとくに耳根に多発する。赤くはれ、のち水をもち、これがうみになり、破れてかさぶたになったりする。1~2%クレゾール石けん液で洗ってからクレオリン軟こうやほう酸軟こうをぬってやる。

かいせんはかいせん虫の寄生でおこるもので、耳根、内股、足の内側などがやられる。かゆいのでかくため、脱毛、赤い斑点、出血、のうほうなどが現れるのがふつうで、治療はカリ石けん液とグリセリンの等分液で皮ふをやわらかくして、ナフトール5g、精製硫黄25g、カリ石けん5g、ワセリン50gの割でぬった軟こうをぬる。

のうほう性皮膚炎は、蚊に刺されできる「カぼうそう」の1種で、大豆大の発しんが、しだいにうんできて、しまいには数個が集まり、大きなおできができる。大へんかゆがる。

2%クレゾール石けん液で洗い、クレオリン軟こうをぬってやるとよい。